

神のことば

「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」(イザヤ書55:10-11)

神のことばの本質

「神のことば」(「主のことば」、「みことば」)という言葉回しは聖書の中ではいろいろなかたちで理解されている。

- (1) 神が直接話されたことを指している。神がアダムとエバに話されたときに(創2:16-17, 3:9-19)神が言われたことは神のことばだった。神はみことばをアブラハム(創12:1-3)、イサク(創26:1-5)、ヤコブ(創28:13-15)、モーセ(出3:-4:)に話された。神はまたシナイ山でイスラエル民族全体に話され、「十戒」を与えられた(→出20:1-19)。モーセが人々に戒めを伝えたときに人々が聞いたのも神のことばだった。
- (2) 神は直接話されただけでなく、預言者たちを通して話された(「旧約聖書の預言者」の項 p.1131)。預言者たちが神の民にメッセーヂを伝えたとき、「主はこう仰せられる」、「主のことばが私にあった」と初めに言うのが普通だった。だから預言者のことばを聞くときイスラエル人は神のことばに耳を傾けていたのである。
- (3) 神は新約聖書の使徒たち(初代教会の開拓の指導者、メッセンジャー)を通して話された。(預言者たちと違って、使徒たちは神が話すように導かれたときに「主はこう仰せられる」とは言わなかった。けれども使徒たちが宣言したことは確かに神の油注ぎを受けたことばだった。たとえばパウロがピシデヤのアンテオケの人々に話した説教は(使13:16-41)非常な興奮を引起こし、「次の安息日には、ほとんどの町中の人々が、神のことばを聞きに集まって来た」(使13:44)。テサロニケ人への手紙の中でパウロは「あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。」(1テサ2:13, →使8:25)と言っている。
- (4) もちろん主イエスが話されたことは神のことばだった。なぜなら主イエスは完全に神だからである(ヨハ1:1, 18, 10:30, ヨハ5:20)。第三福音書(「良い知らせ」、神の物語、イエスキリストの直接の記録を書いた4冊の文書の一つ)の著者であるルカは、主イエスの話を聞いたとき人々は神のことばを聞いたと言っている(ルカ5:1)。興味深いことに、旧約聖書の預言者たちが「主はこう仰せられる」というかたちで話し始めたのとは対照的に、主イエスは「私はあなたがたに言います(告げます)」という表現をしばしば使われた(マタ5:18, 20, 22, 32, 39, 11:22, 24, マコ9:1, 10:15, ルカ10:12, 12:4, ヨハ5:19, 6:26, 8:34)。主イエスは神のことばを話す神の権威をご自分の中に持っておられた。主イエスが言われた「わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです」(ヨハ5:24)ということばに耳を傾けることは非常に重要である。主イエスは神のことばと密接につながっていたので、主イエスご自身が「ことば」と呼ばれている(ヨハ1:1, 14, ヨハ1:1, 黙19:13-16, →ヨハ1:1注)。
- (5) 神のことば、聖書は預言者たち、使徒たち、主イエスが話されたことばの文書になった記録である。新約聖書の中では「モーセが言った」、「ダビデが言った」、「聖霊が言われる」、「神が言われる」ということばを記者が使っても本質的に違いはない(→使3:22, ロマ10:5, 19, ヘブ3:7, 4:7)。聖書に書かれていることはみな神のことばなのである(「聖書の靈感と権威」の項 p.2323)。
- (6) 聖書(聖書というかたちで与えられている文書になった神のことば)と同じレベルの権威を持つものではないけれども、今日、教会で説教者や預言者が宣言することばは神のことばと呼ぶことができる。

(a) ペテロはみことばの説教によって読者が受けたのは、神のことばであると示している(1ペテ1:25)。パウロはテモテに対して「みことばを宣べ伝えなさい」と教えている(1テモ4:2)。けれどもこのような説教は記録された神のことばから離れて存在しないし受け入れられるものでもない。実際に説教またはメッセージの中で本当に神のことばが宣べ伝えられているかどうかを決定するのは、それが神の文書になったことばに一致しているかどうかである(「にせ教師」の項 p.1758)。

(b) 礼拝の中で預言(ほかの人々に伝える神のメッセージ)または啓示を受けた人はどうなのだろうか(1コリ14:26-33)。その人は神のことばを受けたのだろうか。その答は条件付で「はい」である。パウロはそのようなメッセージは教会または会衆の中でほかの人々によって吟味されなければならないとはっきり言っている。したがってそのような預言が神のことばとして確認されないこともある(→1コリ14:29注)。今日の預言者は第二義的なより低い意味で聖霊の靈感を受けて話していると言うことができる。今日の預言者または預言の賜物を持つという人が話す啓示は聖書のように誤りがなく完全に信頼できるレベルにまで高く評価してはならない(→1コリ14:31注、→「御霊の賜物」の項 p.2138、「奉仕の賜物」の項 p.2225)。今日神から与えられるメッセージはみな神が既に文書にされたみことば(聖書)に啓示されたことによって測られ、それを土台にしたものでなければならない。

神のことばの力

神のことばは「天において定まって」いる(詩119:89、イザ40:8、1ペテ1:24-25)。けれどもそれは静止した不活発なことばではなく、活動的で力強く(⇒ヘブ4:12)、偉大なことを成し遂げる(イザ55:11)。

- (1) それは創造のことばである。天地創造の記事によれば神がことばを出されたときに世界は存在した(創1:3-4, 6-7, 9)。詩篇の作者はこの過程を「主のことばによって、天は造られた」と要約し(詩33:6, ⇒33:9)、ヘブル人への手紙の著者は「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り」(ヘブ11:3, ⇒11:5)と言っている。ヨハネによれば神がすべてのものを創造するのに用いたことばはイエス・キリストだった。このことには注目をするべきである(ヨハ1:1-3、「天地創造」の項 p.29)。
- (2) 被造物を維持し存在し続けるようにさせる力を持っている。神は「その力あるみことばによって万物を保っておられる」(ヘブ1:3, →詩147:15-18)。創造のことば(ことばによって物事を存在させる神の力 → 創1:)と同じように、被造物を保つことばもイエス・キリストとかわりがある。実際にパウロは「万物は御子にあって成り立っています」と主張している(コロ1:17)。
- (3) 新しいいのちを与え、現し、伝える力を持っている。ペテロは「私たちは「生けるまいつまでも変わることはない、神のことば」によって生れたとあかししている(1ペテ1:23, ⇒11:5)」。この理由から主イエスご自身が「いのちのことば」と呼ばれている(1ヨハ1:1)。
- (4) 恵み(受けるのにふさわしくない神の好意、あわれみ、助け)と力と啓示を与え、これによってキリストに従う人々はイエス・キリストに対する信仰と献身の成長をする。イザヤはこの真理を力強く描写して空からの水が肉体的成長をさせるのと同じように、神の口から出るみことばは私たちが霊的に成長させる(イザ55:10-11)と言っている。ペテロは同じ思想を神のことばの「純粋な、みことばの乳」を飲むことによって、神との関係で成長すると繰返している(1ペテ2:2)。
- (5) サタンとその悪い策略と戦うために神がくださった「御霊の与える剣」である(エペ6:17, ⇒黙19:13-15)。荒野でサタンの誘惑に勝利された記事の中で、主イエスは毎回「**神のことば**」と書いてある(これは確かでない完全な信頼できる神のことばであるという意味 → ルカ4:1-11, →マタ4:1-11注)と宣言してサタンを撃退された。
- (6) 私たちをさばく力を持つ。旧約聖書の預言者たちと新約聖書の使徒たちは主から受けた矯正、訓戒、さばきのことばをしばしば伝えた。主イエスご自身も主のことばが主を拒む人をさばくと言われた(ヨハ12:48)。そしてヘブル人への手紙の中には神の力強いことばは「心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます」と書いてある(⇒ヘブ4:12注)。これらはみな神のことばを無視しようとする人はいつか、有罪とさばきの宣告のことばとしてそれを聞くことになるということである。

